

トライアルセッション

入学おめでとう！

コラム国へも
ぜひぜひ入国してください！

by TA一同



www.columnland.net/

にて作者さん&読者さんの声実況中

大きな桜の木の下で

大きな桜の木の下で

あなたと私

さばさば別れましょう

大きな桜の木の下で

大きな桜の木の下で

お話ししましょう

あなたの進路

大きな桜の木の下で

大きな桜の木の下で

大きな野心を

粉々に砕きましょう

大きな桜の木の下で

大きな桜の木の下で

落ちてくる毛虫

さらさらっと払いましょう

大きな桜の木の下で

『阪神競馬場、クラシック第一弾。第六十五回桜花賞G1芝コース一六〇〇m。待っていました、十八番シルクリサーチ、最後のゲートイン』

広い草原。そこに小さな古屋があった。傍には看板が立てられている。『乗馬体験30分 大人二〇〇〇円 子ども 一五〇〇円』
「すみませーん」

受付の奥に声をかける。すると、はいという声と共に奥から五十代のおじさんが出てきた。

「えーと」私は近くに立てられた看板を指差し、「乗馬体験、いいですか？」と、聞いた。

「はい、大丈夫ですよ。それではこちらへどうぞ」と、おじさんは私を古屋の裏へと連れて行ってくれた。

そこには六頭の馬が繋がれていた。鼻をつく獣の匂い。懐かしい匂いだった。

『各馬一斉にスタート、綺麗に揃いました。シルクリサーチいいスタート、しかし各馬一斉に殺到していく。後ろからシュンキル、イサオヒート、ニホンピロホーリーと続いて行く』

「えーと乗馬の経験はありますか？」

「はい、一応」

「そうですか、じゃこの子なんかどうですか、大人しい子なので、乗りやすいですよ」

そう言っただけは芦毛の馬を指差した。確かに大人しそうな顔をした、とても可愛らしい馬であった。

しかし、その間もずっと私の目にはさつきから一頭の馬しか目に入っていなかった。

「この子に乗りたくないんですが、いいですか？」
私は栗毛の馬を指した。

「んー、そいっですか。そいつ女の子の癖に結構気性が荒いんですよ」

「でも、この子がいいんです」
「はあ、分かりました。えっと、コースとかは大丈夫ですか？」

「はい、大丈夫です」

「うん、それではいってらっしゃい。じゃシルキーマも頑張ってお仕事するんだぞ」

そう言っただけは馬の背を何度か撫でた。
「そうか、今は彼女はシルキーマと呼ばれているのか。」

『第三コーナー600の表示を通過して、これから第四コーナーに入ります。先頭はシルクリサーチ、ニホンピロホーリーから三馬身の差をとりました。そこから、イサオヒート一馬身開いてシュンキル』

カポカポと蹄の音と共に、彼女の体も左右に揺れる。どうどう、と手綱を取り、いつもより高い視線から

辺りを見渡す。一面の草原。たまに吹く高原の風が肌を撫でる。

目の前のタテガミを触ると、首筋は温かく。動いた際に筋肉が上下するのを感じる。

あのとこのように、早く、もつと早く、走ろうとしていた彼女はもうここにはいなかった。

『最終コーナーまわって、先頭はシルクリサーチ、シルクリサーチ。その差五馬身。ラストスパートに入る。騎手も鞭を構えた。先頭はシルクリサーチ。ああ、シルクリサーチ転んだ。落馬、落馬です。十八番シルクリサーチ落馬です。その間に大外からニホンピロホーリー、ニホンピロホーリー』

競馬の世界において繁殖馬になれるのは、本当に一流の馬だけで、多くの元競走馬は仲介業者の手を経て、家畜飼料・加工用として処分される。そして、一部はどこかで引き取ってもらい、今も乗馬用の馬として人を乗せている。

それは怪我によつて競走馬を引退したのものにも当てはまる。

丘の上に着くと、彼女は一際遠くを眺めると、静かに今来た道を戻りだした。

昔は他の馬を寄せ付けず圧倒的な速さで、大歓声のスタンドの前を走り抜けていた。

辺りは静まりかえっている。
あのとこの大歓声は聞こえない。

もう走れない足で、ゆっくり慎重にあのとこのように私を乗せて行く。それでも彼女の目はあのとこのように遙か彼方を望んでいた。

彼女にとつてこれも一つのレースなのかもしれない。そう、思った。

「お疲れ様ー、ゴールです。大丈夫ですか、暴れたりしませんでした？」

「ええ、昔に比べて大分大人しくなっていましたよ」
私の言葉に彼は変な顔をしたが、

「まあ、それなら良かったです。シルキーマもお疲れ」
そう言っただけは彼女に声をかけた。

そのとき、古屋の方から、すみませーんと声が出た。
「あ、すみません。お客さんが来ちゃったみたいです。今日はありがとうございました」

「いえ、こちらこそ、ありがとうございます。いい思い出ができました」
おじさんはパタパタと古屋の方へと歩いて行く。

私は彼女の方を向いた。彼女は美味しそうに水を飲んでる。
「やつと二人でゴールできたね」

これでやつと私たちのレースは終わった。
「さようならシルクリサーチ。元気でね」

そう呟いて歩き出す。

背後からひひんという鳴き声が聞こえた。
少し嬉しそうであった。

春の隠れた努力家

桜は日本において最も人気のあるエンターテイナーである。毎年4月になると、桜はその淡いピンクの花びらを一斉に咲かせ、私たち日本人はこぞって花見に出かける。満開になった桜の木の下で宴会を開き、風と共に散りゆく桜の花びらに囲まれながら、春の訪れを喜び楽しむのである。花見が始まったのは奈良時代と言われているが、桜は古来から日本人を魅了して止まないエンターテイナーなのである。だが、筆者は桜は一方では隠れた努力家であるようにも思えるのである。

「草木染め」というものをご存知だろうか。化学的に合成されたものではなく、植物などの自然界から直接得られる染料による染物のことである。あらゆる植物を使うことができるが、もちろん、桜も例外ではない。だが、意外に思われるかもしれないが、桜を染料とするとき用いられるのは、花びらではなく、桜の木の枝や木の皮を用いるのである。あの可憐なピンク色の花びらが桜の愛される所以であるが、実際、あのピンク色の実体は花びらにはなく、誰にも見向きもされない固く茶色いごっこつとした木本体にその実体があるのである。

また、染める時期によってもその染物のできばえは全く異なるようである。我が国において有名な染織家である志村ふくみさんという方が書いたエッセイにこんな一節がある。

「その後、桜、桜と思いつめていましたが、桜はなかなか切る人がなく、たまに九月の台風の時でしたが、滋賀県のほうで大木を切るからと聞き、喜び勇んでかけました。しかし、その時の桜は三月の桜と違って、匂い立つことがありませんでした。」

彼女は開花寸前の三月の桜によって染めたことがあり、その時は「匂い立つ」ような色に染まったのだが、春も程遠い九月の桜によって染めたものはそうならなかったのだという。この後に彼女のは次のように綴っている。

「その時初めて知ったのです。桜が花を咲かすために木全体に宿している命のことを。一年中、桜はその時期の来るのを待ちながらじつと貯めていたのです。」

私たちは花見の時期を過ぎると桜の存在を忘れ去ってしまうが、桜は私たちの見えない木の皮の奥で、来年満開の桜を咲かすためにじつくりと準備を進めているのである。開花直前の三月、葉もつけず静かに佇む枯れ木のような桜の中に「匂い立つ」ようなピンクが詰まっていると思うととても趣き深い。

四月に満開の花を咲かせ、わずかに二週間足らずではあるが私たちを楽しませてくれる桜。だが、その背後には誰にも見向きもされない幹の存在と一年間の準備とがあるのである。桜に限らず私たちが感動できるものというのは全てこのような側面をもっていないだろうか。今も変わらぬ感動を与える芸術作品の背後にはこの作品を愛し、後世にまで伝えようと尽力した多くの人がおり、一つの科学理論を確固たるものとするために、無数の科学者達の力が注がれている。私たちの感動できるものの背後には常に人目には隠されたものが存在し、それこそが最も重要な役割を果たしているのである。桜自身が実際に人間達のために努力しているかはまた別の議論ではあるが、春のエンターテイナーでありながら、隠れた努力家である桜に筆者は感服せずにはいられないのである。

小鳥と農家の知恵比べ

あるところにサクランボ農家がありました。サクランボはそろそろ収穫の時期です。しかし、最近小鳥がサクランボをついばんでしまつて農家はほとほと困つていました。そしてあるとき、こんなことがサクランボの木に書かれていたのです。

「**このサクランボはとっても甘い。まるで作った人のようだ**」

この書き込みに農家の主人はとても腹を立て、小鳥を懲らしめてやるつもりでした。

まず、農家は気のあちこちに痛いところをたくさんつけました。

これで小鳥はサクランボを食べられまい。

農家はそう思つてサクランボの木を後にしました

しかし、農家があつたと思つた次の日にサクランボの木を見てみると

「**上の方のサクランボはおいしかったなあ**」

と書いてあるではありませんか。農家があつてサクランボの木に登つてみると…

「いたいっ！ いたいっ！ 自分で仕掛けたとげに引っかかつてしまいました。これではサクランボが収穫できません。危ないので農家はしびしびとげを外すことにしました。

次に農家はサクランボの木にこんな立て看板をかけてみました。

「**この木のサクランボには一個だけ猛毒を入れておいたぞ**」

これで小鳥は悠々とサクランボを食べてはいられまい。

そう思つた農家は意気揚揚とサクランボの木をあとにしました。

しかし、次の日サクランボの木を見てみるとみごとにサクランボが食べられている上に、看板の「一個」の部分にはこう書き加えられていたのでした。

「**この木のサクランボには二個だけ猛毒を入れておいたぞ**」

農家はしまったと思ひました。小鳥は本当に猛毒が入つていたら農家が安心してサクランボにを収穫できないことを見抜いて、毒なんて入つてないとわかつていたので。その上逆に毒を入れられたかもしれないことを考えると、農家はどうしてもそのサクランボを収穫することができなくなつてしまいました。

こうして農家はサクランボを小鳥にたくさん、たくさん食べられてしまいましたとぞ。めでたしめでたし

明日へ

今日、僕は
この桜の下で
新しい一歩を踏み出す

今まで
たくさんの努力をして
たくさんの後悔をして
たくさんの苦労をした
ここにくるまでの道程は
僕しか知らない影だけれど
桜の花びらが
蔭に影を積み重ねて
景色をつくりだすように

今、僕は
新しい一歩を
踏み出す
重なる影が
つくるものを
のために。

親愛なるblossom

英語には「花」を意味する語が「blossom」「bloom」と二つあり、それぞれ使い分けがされる。「blossom」は食用の植物の花、「bloom」は観賞用の花に使う。例えばジャガ

イモの花は「potato blossom」、薔薇の花は「rose bloom」と言いた感じだ。ではここで一つ考えてみよう。「桜の花」は英語でいったいどうだろうか？正解は「cherry blossom」である。桜は観賞用であるのになぜ「blossom」というのだろうか。

なぜそうになっているのかは想像に難くない。一途に欧米と日本との桜の使われ方の違いによるものである。

現在日本で一番植えられているのは「ソメイヨシノ」という観賞用の品種だ。特に老いたソメイヨシノはその枝いっぱいをほんのり薄いピンクの花で埋め、見る者を感動させる。4月の初めごろに東京や京都の街を歩けば、いたるところでその花をみることができ

一方欧米で植えられている桜の品種は「セイヨウミザクラ」「スミミザクラ」と呼ばれる科の桜が多い。そう、いわゆるサクランボの木である。古来、重要な食物であるサクランボは欧米人にとって食用である面が強いのだ。

ソメイヨシノやその他日本で多く植えられる品種はその実が薄くて固く、食用には適さない。我々日本人はそれでも古来、古今和歌集の時代より桜を観賞用に愛してきた。今でも山形県などでは盛んにサクランボ

が生産されているが、その桜への愛は強く、日本人の中に「桜は観賞用」とのイメージが刷り込まれていることから先のような思い違いが生まれたのだろう。

ただし、桜への強い愛は全国区ではない。

北は北海道に行ってみると、寒冷な気候のせいもあって大きくて長寿な桜を見かけることはなく、桜が植えられた大きな公園も密度が少ない。春に各地で見られる「花見」も行う地域は限られ、さらにその料理ではジングスカンが主流であり少々様相が異なる。南は沖縄県へ行ってみると、今度は桜を見かけることも稀である。観光地化された島国でその石灰質な地質も桜の生育に向かず、花見をすることは少ないという。

筆者は初めて4月初旬に東京を訪れたとき、東京人の花見に対する情熱を目の当たりにして大いに驚いた。そう考えると、意外と桜を愛でる地域は狭いかもしれない。桜の名所と呼ばれる場所は地方に行くほど離散し、筆者の地元がそうであったようにそこから漏れた地域には花見の文化が育っていないこともあり得るだろう。

われわれ日本人が古来より好んできた桜は、多くの人々を感動させてきたことは間違いない。ただし欧米など花見の文化が育っていない地域が多くあることから、それを愛でる文化、「花見」は娯楽以上に伝統であると意識すべきであるかもしれない。

桜を見るには、夜に酒と共にがいい。

「ああ、変わっていないなあ」

ゆつたりと父が言う。私は父とともに花見に来ていた。昔から厳格な父は、この年になるまで私にはずっと厳しい印象しかなかった。昔はここでこんなことをしていたんだ、とうれしそうに話す父を私は始めてみたかもしれない。もちろん、こんなに穏やかな父の姿も、だ。

「桜、ちょうど満開か…」

風で静かに花卉が散る。昔話をしているうちに、いつしか人気のない所に来ていた。人が多いところは子供の声や笑い声であふれていたが、私たちがいたところは本当に無音だった。それでも桜は見事に咲き誇り、縦横無尽に枝をのばしてたたずんでいた。

「これでもう、見納めかなあ」

静かだからこそ耳に残った父の言葉。その表情は、後ろを追う私には決して見ることはできなかった。

私は、その同じ場所で一人夜桜を眺めている。結局あの時は見納めにならなかったのだが、後にあの言葉が本気であったことを知った。父のことだ、ほとんど誰にも話さなかったに違いない。あの時、もっと何か話せたらと後悔ばかりを思い出す。

数年前のことを繰り返し思い出しているうちに、ずいぶんと花卉を浴びてしまった。私は、桜の花卉の入ったお猪口に日本酒を注ぎ、花卉と共に飲み干した。

日本酒で満たされたもう一つのお猪口に、また一つ花卉がかかる。飲む相手はもういないが、もし幻影でも見えてくれれば、と酔いの回り始めた頭でぼんやり考えていた。

酔いが回り幻影を見てまわ、会いたい人がいるのだから。

「こちらE班！ 八百屋『お七』にてパクチー及びモロヘイヤ発見につき購入致します！」

「苦勞、購入後E班は待機せよ。C班、リストNO.15『七又千才』はピスタチオと判明した。ただちに乾物屋『ツタンカーメン』へ向かえ。」

「Sir! Yes sir!」

さて、残るはNO.39か・・・サクラ？

この春の学園祭、我がサークルは模擬店を出すことになったのだった。その名も和風食事処『MIYABI』。あくまでも和『風』である。部長率いる調理チームの他に接客・勧誘チーム、仕入れチームがあり、私は仕入れチームを率いている。仕事内容はただの仕入れなので普通にやってもつまらない。せつかなので、軍隊のノリを取り入れてみた。

「では、サクラの解説にうつろう。」

「やはりサクラといえは馬肉なのでは？」

「しかし、あの部長がそんな言い回しをするだろうか？ 部長にとつて馬肉は馬肉だろう。」

「最近塩漬けの桜の花や葉も売ってますよ。」

「インテリアとして、本物の桜を所望している可能性も・・・。」

「もしかしたら、客寄せとしてサクラを仕込めということでは？」

「いやそれは・・・。」

サクラ議論は徐々に激しさを増していった。

収拾がつかなくなつた議論を止めたのは、ほんの一言であつた。

「全部用意すればよくね？」

そう、それこそが我らの取るべき道だつた。

「B班は桜の枝を調達してくれ・・・いや、公園でなく、つてもしもし？ D班！ B班が器物損壊で捕まる前に止めてくれ！」

「A班！ 桜海老と桜鯛を手に入れました！」

「了解。次は花屋『雫』で桜の枝を探せ。」

「こちらC班！ 河口恭吾ケツメイシコブクロ 森山直太朗レミオロメン等がありました！ どれにしましょう？」

「それは違・・・いや、BGM用かもしれない。よし、全部だ。全種類買え。」

「い・・・Yes sir!」

かくして、様々な『サクラ』が揃えられた。各班に撤退を命じ、仕入れチームの任務は完了した。

「・・・なんだコレ？ 何の冗談だ？」

部長は『サクラ』の山を見て呆気にとられていたようだった。

「見ての通り、サクラだ。一通り揃えてみた。」

「そんなものを頼んだ覚えは無いぞ。」

「ん？ ほら、NO.39にちゃんと・・・。」

「ちゃんとサワラって書いてあるだろうが！ 仕入れチームは日本語も読めないのか！」

「いや、お前の字は日本語じゃ無いだろう。ひじきが散乱しているのかと思った。」

「どーしてくれるんだ！ サワラが無ければ

『鱈、春うらら』は完成しない！」

「そのネーミングセンスもいかなものか。ま、いずれにしても仕入れチームはもう動かない。全員撤退させて・・・あれ？」

部長が散々こねたサワラは、ほつたらかしくなされていたE班に購入させた。『鱈、春うらら』が注文されたかどうかは、また別のお話である。

コンテスト結果

[Aの部]

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
A01	大きな桜の木の 下で	5 pt	4 位	0 sp
		歌のリズムにポップ気分♪ ネタかな～、テツガクかな～、読み手の気分でどちらとも取れるゆるさが、いい感じですよ。肩肘張らずにとぼけ加減な、アザラシブロックの表紙作品でした。 イチオシフレーズ：「落ちてくる毛虫さらさらっと払いましょう」×3 「大きな野心を粉々に砕きましょう」×2		
A02	誰も知らない ゴール	31 pt	1 位	0 sp
		さすがのストーリーテラー。そのまま映画のラストシーンに行けそうよ。 切迫した実況と、カポカポののどかさが交互に、というさじ加減が絶妙です。それと、馬の体臭とか体温を感じさせたこまやかな描写！ まあね、しかたないよね、こんなにみなさんのツボに入ったのでは。圧勝首位のついでにイチオシフレーズ大賞も持って行ってくださいな。おめでとう!!! イチオシフレーズ：「やっと二人でゴールできたね」×8 「これで私たちのレースは終わった」「ニホンピロホーリー」「お疲れ様ー、ゴールです。」「懐かしい匂いがした」		
A03	春の隠れた努力家	18 pt	2 位	0 sp
		これなむ正統派。レイアウトも新聞風。 一年かけて徐々に匂い立たせてゆく。可憐な花びらでなく、どしりと黒い幹のほうに視線を投げかけたところも着眼ユニークでした。 しっかり読んでもらえての2位、おめでとう！ イチオシフレーズ：「私たちが感動できるものの背後には……」「ピンクが詰まっている」「匂い立つ」		
A04	小鳥と農家の知恵比べ	9 pt	3 位	0 sp
		わあい小鳥くんの勝ちっ！フォントとセリフのかわいらしさで、最初から読者は小鳥の味方。だから読後感ハッピー。 しっかりと読者さんの気持ちをつかまえた組み立てでした。 イチオシフレーズ：「めでたしめでたし」		

[Bの部]

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
B01	明日へ	14 pt	2 位	0 sp
		レイアウト派参上！何と桜の花びらのカタチ。さらりと視覚的に見せて好感。影というコンセプトを含み込んだことによって、単なるポジティブメッセージではない「翳り」が加わったところも良かったです。		

		文章へタだからレイアウト派なんて、ご冗談。削りに削ったシンプルなフレーズだからこそ輝いて映えるのです。2位、おめでとう！ イチオシフレーズ：「蔭に影を積み重ねて景色をつくりだすように」×2 「明日へ」×2
B02	親愛なる blossom	7 pt 4 位 0 sp 単語のささやかな違いから文化論に広げて展開あざやか。 あんまり身近過ぎてお花見の地域性なんて考えたことなかったです。そんな、ついあたりまえと思っていることを相対化する論理が説得的でした。
B03	桜酒	27 pt 1 位 0 sp 死」をストレートに表現せず、「見納め」という言葉に閉じ込めたおかげで、しみじみと懐旧の情が醸し出されています。 父の姿も、どんな宿命だったのかも、茫洋と桜の向こうに淡く霞んで。 語りすぎない良さ、堪能させていただきました。首位、おめでとう!! イチオシフレーズ：「ずいぶんと花弁を浴びてしまった。」 「後ろを追う私には決して見る事ができなかった。」 「桜を見るには夜と酒と共がいい。」×2 「酔いが回り幻影を見てまで会いたい人がいるのだから。」×2 「花弁」「花弁と共に飲み干した。」
B04	さくらさまざま	12 pt 3 位 0 sp ネタ師登場。うまいなあ。最初のピスタチオが、しっかり伏線になってますね。 引っ張って引っ張って、かっくり拍子抜けオチ。おみごとでした。 ハナ差で桜酒を刺しきってのイチオシフレーズ大賞です。おめでとう！ イチオシフレーズ：「七°ヌタ千才」×3 「ひじきが散乱しているのかと思った」×3 「サワラ」「やはりサクラと言えは馬肉なのでは？」 「Sir! Yes Sir!